

原著論文

テオプシス節ツバキ属種間交雑による
つばき農林2号‘彩祭り’および同3号
‘雪祭り’の育成経過とその特性†

柴田道夫・間竜太郎・岸本早苗・
谷川奈津・小野崎隆・家弓實行*

(平成15年8月15日受理)

Breeding Process and Characteristics of Camellia Norin No.2 ‘Ayamatsuri’ and No.3 ‘Yukimatsuri’ by Interspecific Hybridization between *Camellia rosaeiflora* and *C. fraterna* Belonged to Section *Theopsis*

Michio SHIBATA, Ryutaro AIDA, Sanae KISHIMOTO, Natsu TANIKAWA,
Takashi ONOZAKI and Saneyuki KAYUMI

Summary

In order to breed new camellia cultivars with upright plant form and early flowering property, interspecific hybridizations among 4 kinds of *Camellia* species belonged to section *Theopsis* were conducted. Five hundred and sixty-two flowers were crossed in 1990. Eleven interspecific hybrid seedlings were planted to open field in 1993 and their characteristics were investigated for the following selection. Two seedlings derived from the cross between *C. rosaeiflora* Hooker and *C. fraterna* Hance were finally selected in 1998 and were registered as Camellia Norin No.2, ‘Ayamatsuri’ and Camellia Norin No.3, ‘Yukimatsuri’ in 2002. ‘Ayamatsuri’ and ‘Yukimatsuri’ shows the intermediate characteristics form between *C. rosaeiflora* and *C. fraterna*. The flower color of ‘Ayamatsuri’ is pink (JHS color chart No.9504) and that of ‘Yukimatsuri’ is white (JHS color chart No.2201). Flower diameter and the number of petals of both cultivars are approximately 3 cm and 5 or 6 respectively. The natural flowering time of ‘Ayamatsuri’ and ‘Yukimatsuri’ are between the beginning or middle of February and the middle of April in Mie prefecture. These two cultivars could be used as a set.

Key Words: ツバキ属, テオプシス節, 種間雑種, 早春咲き, 極小輪

† 本研究の一部は園芸学会平成15年秋季大会で発表した。

* 元野菜・茶業試験場久留米支場

1. 緒言

わが国に自生するツバキ属 (Genus *Camellia*) 植物としては、*Camellia* 節に分類されるツバキ (*Camellia japonica* L.) と *Paracamellia* 節に分類されるサザンカ (*C. sasanqua* Thunb.) がよく知られており園芸的に広く利用されている。しかし、この2種とは全く異なる *Theopsis* 節に分類されるヒメサザンカ (*C. lutchuensis* T.Ito) も南西諸島に自生している (Sealy, 1958; 張, 1981; 関, 1999)。 *Theopsis* 節に含まれる野生種は、ツバキやサザンカにはみられないやわらかく明るいイメージを与える樹姿および葉姿を示し、小輪多花性で、ヒメサザンカのように強い芳香性をもつ種も存在することから、海外を中心に種間交雑に用いられつつある。Ackerman(1971) はツバキ属において広汎な交雑育種を試み、数多くの種間雑種を作出しており、その中で *Theopsis* 節内の種間交雑にも成功している。近年、ヒメサザンカとサルウィンツバキ、ヒメサザンカとヤブツバキ、シラハツバキとヤブツバキなどの交雑により小輪多花性のミニツバキ品種が育成されてきている (萩屋, 1990)。

農林水産省野菜・茶業試験場 (以下、野菜茶試) 久留米支場緑化植物研究室 (1991年に野菜茶試花き部 (現

独立行政法人農業技術研究機構花き研究所) に移設) では新しいツバキ品種の育成を目標に1989年より種間交雑育種を開始した。その一環として、これまでにないやわらかく明るいイメージを与える新しいツバキの育成を目的として、*Theopsis* 節内の種間交雑に着目し、1989年に交雑試験を開始した。その結果、育種目標に近く、立性でピンクと白の花色を有する2品種を育成し、2002年8月に農林水産省育成品種つばき農林2号‘彩祭り’および同3号‘雪祭り’ (以下、単に‘彩祭り’と‘雪祭り’と略す) として登録したので、ここにその育成経過、品種特性を取りまとめて報告する。

本品種の系統適応性検定に当たり、埼玉県農業総合研究センター園芸研究所、九州沖縄農業研究センターの担当研究員各位の協力を得た。また、本品種の交配に当たり永留明子氏の協力を得た。さらに、野菜茶試久留米支場 (枕崎) の板元利男氏をはじめ、枕崎および安濃の業務科職員の方々には本品種の育成に関して、多大なる協力を得た。ここに記して御礼申し上げる。

本品種の育成については、家弓は1989～1990年に、柴田は1989～2002年まで、間は1991～2000年まで、岸本は1996～2000年まで、谷川、小野崎は2001～2002年まで、それぞれ担当した。

第1表. *Theopsis* 節内における交雑における結果率 (1989～1990)

野生種 (種子親: ♀ \ 花粉親: ♂)	結果数 / 交配数 (結果率%)		
	ヒメサザンカ	シラハツバキ	ウスバヒメツバキ
ヒメサザンカ	—	47/105 (44.8)	13/106 (12.3)
シラハツバキ	0/68 (0.0)	—	—
ウスバヒメツバキ	0/20 (0.0)	—	—
ローゼフローラ	10/112 (8.9)	12/121 (9.9) ^z	3/30 (10.0)

Z ‘彩祭り’ (旧系統名 1+2) および ‘雪祭り’ (旧系統名 1+6) の得られた組み合わせ

第2表. *Theopsis* 節内交雑によって得られた種間雑種系統

交配組合せ (種子親 × 花粉親)	最終獲得雑種数
ヒメサザンカ × ウスバヒメツバキ	5
ローゼフローラ × シラハツバキ	6 ^z

Z ‘彩祭り’ (旧系統名 1+2) および ‘雪祭り’ (旧系統名 1+6) の得られた組み合わせ

2. 育成経過

1) 育成経過

1989年秋に野菜茶試久留米支場茶樹育種研究室（鹿児島県枕崎市）で保存中の *Theopsis* 節4種（ヒメサザンカ：*C. lutchuensis*, シラハトツバキ：*C. fraterna*, ウ斯巴ヒメツバキ：*C. nokoensis* Hayata, ローゼフローラ：*C. rosaeflora*）を用いて交雑を行った。ヒメサザンカとウ斯巴ヒメツバキは染色体数30の二倍体、シラハトツバキは染色体数90の六倍体、ローゼフローラは染色体数45の三倍体である。ローゼフローラは雄性不稔のため種子親としてのみ用いた。交雑は開花直前のヤブツバキのつぼみを解剖バサミで切開・除雄後に、花粉を柱頭に授粉する方法で行った。他の花粉による交雑を防ぐために袋かけを行った。合計で7組み合わせ、562花の交配を行った（第1表）。朔果が直径1cm程度に生育した1990年6月に袋を取り去り、結果率を調査した。結果率は、種子親に用いた野生種で大きく異なり、ヒメサザンカおよびローゼフローラを種子親に用いた場合のみ結果した（第1表）。種子が十分に成熟したと思われた同年8月に、交雑種子を採種した。同年11月に交雑種子（ローゼフローラ×シラハトツバキの交雑では12粒）を播種し、発芽後の1991年の春に土を入れた9cm黒ビニルポットに鉢上げした。ヒメサザンカとシラハトツバキとの組み合わせでは結果率は高かったものの、得られた種子のほとんどがしいなで全く発芽しなかった。ローゼフローラを種子親とした場合では、花粉親をシラハトツバキとした場合のみ発芽個体が得られた（第2表）。1993年9月に野菜茶試（三重県安芸郡安濃町）の圃場に養成した実生11株を定植した。最終定植にまで至ったのは、ヒメサザンカ×ウ斯巴ヒメツバキ5個体とローゼフローラ×シラハトツバキ6個体の合計11個体のみであった（第2表）。一部の個体が開花し始めた1994年春以降、特性調査を実施した。約500花の交雑からわずか11の雑種個体しか得られなかったことは、同じ *Theopsis* 節内でも倍数性が大きく異なる交雑組み合わせでは雑種を得にくいことを反映した結果と考えられた。なお、Ackerman (1971) もローゼフローラとシラハトツバキとの種間雑種について報告しているが、用いたローゼフローラは染色

体数90の六倍体であったとしている。すなわち、今回得られた雑種はAckerman (1971) が作出した種間雑種とは異なり、新規の種間雑種であるものと考えられる。

1999年に得られた種間雑種11系統の中から、ツバキやサザンカにはないやわらかく明るいイメージの樹姿および葉姿等の新規性を持ちながら、鮮やかな花色および強健な生育を示した系統‘1+2’および‘1+6’（ローゼフローラ×シラハトツバキ）を選抜し、安濃番号を付与して以後の試験を行った。3カ年にわたる系統適応性検定試験の結果、両系統は鮮やかな花色、早春咲き性および特徴ある樹姿などでこれまでの雑種品種にはない新規性が認められ、新しい鉢物用ツバキとして有望と判定された。2002年8月につばき農林2号‘彩祭り’および同3号‘雪祭り’として命名登録された。

2) 育成品種の交配親

‘彩祭り’および‘雪祭り’は、1989年に *C. rosaeflora* Hooker (保存番号 No.1121) を種子親に、*C. fraterna* Hance (保存番号 No.1119) を花粉親として交雑して育成された品種である。

(1) 種子親、ローゼフローラ *C.rosaeflora* Hooker

1850年代に中国から英国へ導入された。正確な原生地は不明であるが、花色や花の形態から雑種起源ではないかと考えられている。花は鮮紫ピンク。花弁は6～9枚、花径は3.5～4cm、開花期は1～3月。葉は楕円～長楕円形で、長さ5～8cm、幅2～3cm、表面は緑～黄緑色で、光沢はあまり強くない。分枝性はあまり強い方ではなく、枝が長く伸長して樹形が乱れやすい（箱田・足立、1985、第1図）。

(2) 花粉親、シラハトツバキ *C.fraterna* Hance

中国大陸内では最も北方まで分布する種で、耐寒性は比較的強い。自生種そのものでも鉢物として観賞できるが、小型ツバキ作出のための交配親として利用される。日本へは1960年ころにアメリカ経由で渡来した。花は白色、花弁は5枚、花径は4cm程度、花弁は平開し、咲き進むと弁端が後方へ反り返る。開花期は1～3月。葉は長楕円形、長さ4～5cm、幅1.5～2cm、薄質、表面は灰緑色で、光沢がなく、葉脈は不鮮明である（箱田・足立、1985、第2図）。



第1図 種子親 ローゼフローラ (*Camellia rosaeflora*)



第2図 花粉親 シラハツツバキ (*Camellia fraterna*)

3. 品種特性

1) 自然開花期・生育特性

1999～2001年の3カ年にわたり、‘彩祭り’および‘雪祭り’の系統適応性検定試験を、埼玉県農業総合研究センター園芸支所（埼玉県久喜市）、九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部（福岡県久留米市）、育成地である花き研究所生理遺伝部（三重県安濃町）の3カ所で実施した。対照品種を‘ローゼフローラカスケード（以下、ロ・カスケードと略す）’として、埼玉農総研および九農研セでは、挿し木および接ぎ木苗を毎年3～6株供試し、無加温ガラス室で鉢栽培した。また、育成地では露地栽培での開花特性を調査した。なお、対照品種の‘ロ・カスケード’（第3図）は *C.rosaeflora* を種子親、花粉親が不詳の雑種とされるが、‘彩祭り’および‘雪祭り’に最も近い特性を有することから選定した。

3カ年の試験における開花特性（第3表）をみると、‘彩祭り’は‘ロ・カスケード’よりも開花初めが早く早春咲き性を示した。また、2001年の久留米を除き‘雪祭り’も‘ロ・カスケード’よりも開花初めが早く早春咲き性を示した。花径は‘彩祭り’および‘雪祭り’とも‘ロ・カスケード’とほぼ同等かやや小さく、3～4cmとごく小輪であった。花弁数は‘彩祭り’および‘雪祭り’とも‘ロ・カスケード’よりもやや少なく、5～6枚であった。花色は‘ロ・カスケード’が淡いピンク色であったのに対し、‘彩祭り’は明るいピンク色を、‘雪祭り’は明るい白色

を示した（第4図）。‘彩祭り’、‘雪祭り’および‘ロ・カスケード’とも、雄蕊の色は黄色、花糸の色は白色で、子房に毛はなく、*Theopsis* 節野生種やツバキ品種に近い開花特性を示した。

露地栽培における自然開花期および生育特性を、安濃圃場に1993年に定植した実生株（‘彩祭り’および‘雪祭り’）で継続して調査した。対照には同じく1993年に定植した挿し木約10年生の品種‘ロ・カスケード’および交雑に用いた両野生種を用いた。

交雑に用いたローゼフローラの三重県における自然開花期は2～4月であり、シラハツツバキはこれよりやや早く1～4月であった（第4表）。‘彩祭り’は早い時には1月から、遅い時でも2月から開花し、‘雪祭り’も早い時には1月から開花した（第4表）。また、‘彩祭り’および‘雪祭り’の開花終わりはローゼフローラ、シラハツツバキおよび‘ロ・カスケード’と同様にほぼ4月であり、結果として長い期間開花していた。1999年には研究室で保存中のツバキ属種間雑種17品種における自然開花期を調査したが、‘彩祭り’は、*Camellia* 節と *Theopsis* 節との節間雑種である‘フラグラントピンク’とほぼ同様に、調査した種間雑種の中で最も長い自然開花期を示した（第5表）。

‘彩祭り’の新梢量は、2000年‘ロ・カスケード’に比べてかなり劣ったものの、展開葉数は同等の生育量を示した（第6表）。‘雪祭り’の新梢量は、2000年‘ロ・カスケード’に比べて劣ったものの、1999年の新梢長および展開葉数は、ほぼ同程度であった（第6表）。葉の

大きさや形は、‘彩祭り’、‘雪祭り’および‘ロ・カスケード’の間に大きな相違は認められなかった（第6表）。実生株と挿し木株で前歴が異なること、更に樹齢が異なることから厳密な比較はできないが、‘ロ・カスケード’では枝が発生直後に垂下し始め樹姿が乱れやすいのに対し

‘彩祭り’および‘雪祭り’では先端部はしなやかに屈曲するものの枝は上方に伸長し、樹姿全体が明らかに直立性を示す点が対照品種と異なった（第5, 6図）。花色がピンクと白でよく似た樹姿を有する‘彩祭り’と‘雪祭り’は、対で庭木としての利用も有望と考えられた。



第3図 対照品種 ‘ロゼフローラカスケード’



第4図 つばき農林2号‘彩祭り’および同3号‘雪祭り’の花
左：‘彩祭り’ 右：‘雪祭り’

第3表. 系統適応性検定試験における開花特性および判定結果

系統・品種名	開花期	花径	花弁数	花地色	色斑の色	雄薬の色	花糸の色	子房の毛	総合 ^z 評価
1999年 (埼玉)	月旬	cm	枚						
彩祭り	1上~2上	4.9	5.5	9505	—	黄	白	無	○
雪祭り	1下	3.6	5.7	2201	—	黄	白	無	○
ロ・カスケード ^y	2上~3上	4.0	6.0	9501	—	黄	白	無	
(久留米)									
彩祭り	1中	3.3	4.8	57D	—	黄	白	無	△
雪祭り	2中	2.7	4.9	155C	—	黄	白	無	△
ロ・カスケード ^z	2下	3.2	6.2	49D	—	黄	白	無	
(育成地)									
彩祭り	1上~3下	3.0	5.6	68B	—	黄	白	無	○
雪祭り	1下~3下	3.3	5.6	155D	—	黄	白	無	○
ロ・カスケード ^z	3上~4下	3.8	7.0	62D	—	黄	白	無	
2000年 (埼玉)	月旬	cm	枚						
彩祭り	1下~3上	3.7	5.9	9505	—	黄	白	無	○
雪祭り	2上~3中	3.2	6.0	2201	—	黄	白	無	○
ロ・カスケード ^z	2中~3上	4.0	6.5	9202	—	黄	白	無	
(久留米)									
彩祭り	2中~3中	3.6	5.9	74D	—	—	—	—	△
雪祭り	1中~4中	3.0	6.0	155C	—	—	—	—	△
ロ・カスケード ^z	2下~4上	3.5	6.4	56D, 62D	—	—	—	—	
(育成地)									
彩祭り	1上~3下	3.1	5.7	68B	—	—	白	無	○
雪祭り	2中~4中	2.9	5.5	155D	—	—	白	無	○
ロ・カスケード ^z	3上~4下	3.8	7.0	62D	—	—	白	無	
2001年 (埼玉)	月旬	cm	枚						
彩祭り	2上~2下	4.1	6.0	9505	—	黄	白	無	○
雪祭り	2上~2下	2.9	6.0	2201	—	黄	白	無	○
ロ・カスケード ^z	2中	4.0	6.3	9202	—	黄	白	無	
(久留米)									
彩祭り	1下~3下	3.1	5.9	66D	—	—	—	—	○
雪祭り	2下~3下	2.8	5.9	157D	—	—	—	—	△
ロ・カスケード ^z	2中~3上	2.8	6.3	155C	55C	—	—	—	
(育成地)									
彩祭り	2中~4中	3.1	5.7	68B	—	—	白	無	○
雪祭り	2下~4中	2.9	5.5	155D	—	—	白	無	○
ロ・カスケード ^z	3上~4下	3.8	7.0	62D	—	—	白	無	

^z 判定基準：○) 標準品種より優れる、△) 標準品種と同等、×) 標準品種より劣る。

^y ロゼフローラカスケード

第4表. 三重県安濃圃場における‘彩祭り’および‘雪祭り’の自然開花期

彩祭り	1995～1996年	2月下旬～4月下旬
	1997～1998年	1月上旬～4月上旬
	1998～1999年	1月上旬～3月下旬
	1999～2000年	2月上旬～4月中旬
	2000～2001年	2月下旬～4月中旬
雪祭り	1995～1996年	3月上旬～4月中旬
	1997～1998年	1月下旬～4月上旬
	1998～1999年	2月上旬～3月下旬
	1999～2000年	2月中旬～4月中旬
	2000～2001年	2月下旬～4月中旬
ロゼフローラカスケード	1995～1996年	3月中旬～4月下旬
	1997～1998年	2月下旬～4月上旬
	1998～1999年	3月上旬～4月下旬
	1999～2000年	3月中旬～4月下旬
	2000～2001年	3月上旬～4月下旬
ローゼフローラ	1997～1998年	2月下旬～4月上旬
	1999～2000年	3月下旬～4月中旬
シラハトツバキ	1997～1998年	1月下旬～3月下旬
	1999～2000年	2月上旬～4月下旬

第5表. ‘彩祭り’、‘雪祭り’とツバキ種間交雑品種の開花期比較 (1999)

品種・系統	1月	2月	3月	4月	5月	交雑組み合わせ ^z
	上	中	下	上	中	
港の春				—		紺侘助×ヒメサザンカ
サルト				—		サルウィン×ヒメサザンカ
春風		—	—			S×L?
風鈴一号		—	—			ト半×ヒメサザンカ
港の曙		—	—			関東月見車×ヒメサザンカ
港の華				—		ロゼフローラ実生
港の桜				—		関東月見車×ヒメサザンカ
菊袋				—		菊月×タイニープリンセス
軟風				—		サルウィン×ヒメサザンカ
タイニープリンセス				—		曙×シラハトツバキ
ベビーベア				—		ロゼフローラ×ツアイ
ポップコーン			—	—		不明
T. D. ウィッパー			—	—		不明
サクラ				—		ヤブツバキ×シラハトツバキ
ロ・カスケード ^y			—	—		ロゼフローラ実生?
ゲイベビー				—		(S×J)×(F×J)?
フラグラントピンク		—	—	—		ユキツバキ×ヒメサザンカ
彩祭り		—	—	—		ロゼフローラ×シラハトツバキ
雪祭り		—	—	—		ロゼフローラ×シラハトツバキ

^z ? は不明あるいは不確実、S : サルウィンツバキ、L : ヒメサザンカ、

J : ヤブツバキ系品種、F : シラハトツバキ

^y ロゼフローラカスケード

第6表. 安濃圃場における‘彩祭り’および‘雪祭り’の生育量および葉長

系統・品種	新梢長	対比	展開葉数	対比	葉身長	葉幅	葉柄長
1999年	cm				cm	cm	cm
彩祭り	8.8	97	5.6	104	7.1	2.8	0.5
雪祭り	9.1	100	5.4	100	6.8	2.6	0.5
ロ・カスケード ^z	9.1	100	5.4	100	6.6	3.0	0.6
2000年	cm				cm	cm	cm
彩祭り	7.2	62	5.2	90	6.2	2.5	0.5
雪祭り	6.7	58	4.8	83	4.7	2.2	0.3
ロ・カスケード ^z	11.6	100	5.8	100	6.3	2.7	0.4

z ロゼフローラカスケード



第5図 つばき農林2号‘彩祭り’の樹姿



第6図 つばき農林3号‘雪祭り’の樹姿

2) 鉢物としての生育・開花特性

現在、ツバキは鉢物として挿し木2～3年生苗が主に生産、流通、消費されている。しかし、ツバキの鉢物は、鉢全体につばみを着けて開花させるアザレアなどとは異なり、鉢物自体としての観賞性をそれほど必要としない。通常、つばみを数輪付けた状態の苗が好まれるが、つばみのない苗も園芸店で販売されており、鉢物と言うよりは苗木に近い性格を有している。すなわち、鉢物用ツバキの適性としては、挿し木繁殖が容易で、挿し木後2～3年で着らいうる特性が望まれる。

2000年から2カ年にわたり挿し木発根性試験を行った。新梢が固まった7月上旬以降に挿し木用の枝を母株より採り、葉を2枚着生させた状態で切り戻し調整後数時間水揚げを行い、オキシベロン粉剤(1.0%、塩野義製薬、大阪)を基部に塗布し、寒冷紗で覆ったミスト室内で挿し木した。挿し木用土は、細粒の日向土と鹿沼土を2:1の比率で混合したものをを用い、50×35×10cmの育苗箱に6×7cmの間隔で挿した。日中1時間に1分間ミスト灌水を行った。挿し木後、90～100日程度経過した秋に掘り上げて、発根率、カルス形成率、最長根長、

根数を調査した。対照品種として、2000年は‘ロ・カスケード’、2001年は‘立寒椿’を用いた。1系統・品種あたり20本を供試した。‘彩祭り’の発根率は‘ロ・カスケード’をやや上回り、最長根長および根数もほぼ同等の値を示し、‘ロ・カスケード’と同等の挿し木繁殖性を有するものと考えられた(第7表)。「雪祭り」の最長根長および根数は‘ロ・カスケード’よりやや小さかったものの、発根率はほぼ同等であり、「雪祭り」も問題のない挿し木繁殖性を有するものと考えられた(第7表)。

1999および2000年に育成した挿し木繁殖苗を、その後9cm黒ビニルポットに挿し木と同じ用土で鉢上げし、ガラス室(10月下旬～4月下旬まで最低15℃に加温)内で遮光率70%程度の寒冷紗で覆った条件下で栽培した。施肥はマグアンプK(大粒,ハイポネックスジャパン,

大阪)を適宜施した。鉢上げ後、ほぼ1年および2年を経過した2001年10月下旬に、生育・着らい状況を調査した。‘彩祭り’および‘雪祭り’は約100鉢を、対照の‘ロ・カスケード’(1年生のみ)は20鉢を供試した。

‘彩祭り’は挿し木1年生において、‘ロ・カスケード’に比べて草丈および主幹葉数の値が大きく、生育が旺盛であることが明らかになった(第8表,第7,8図)。また生存個体の着らい率では、‘彩祭り’は挿し木2年生苗で11.0%着らいし、挿し木2～3年生で着らいできることが明らかになった(第8表)。「雪祭り」は挿し木1年生において‘ロ・カスケード’とほぼ同等の草丈および主幹葉数の値を示した(第8表)。また、着らい率では、‘雪祭り’が1年生でも5.6%が着らいし、2年生では82.2%と高率に着らいした(第8表,第7図)。「雪

第7表 挿し木発根性

系統	発根率	カルス形成率	最長根長	根数
	%	%	cm	本
2000年				
彩祭り	100.0	0.0	4.2	11.9
雪祭り	70.0	5.0	3.6	6.1
ロ・カスケード ^z	85.0	0.0	3.4	10.3
2001年				
彩祭り	100.0	0.0	4.5	7.8
雪祭り	100.0	0.0	4.2	5.6
立寒椿	100.0	0.0	4.5	9.7

z ロゼフローラカスケード

第8表. 挿し木1・2年生苗の生育・着らい状況(2001年)

系統・品種	草丈	主幹葉数	着らい率
	cm		%
1年生			
彩祭り	6.5	5.9	0.0
雪祭り	4.3	4.5	5.6
ロゼフローラカスケード	4.4	4.7	0.0
2年生	cm		%
彩祭り	14.0	10.9	11.0
雪祭り	8.1	7.5	82.2



第7図 つばき農林3号‘雪祭り’の挿し木2年生苗における着らいおよび開花

第8図 挿し木1年生苗における生育比較
左:‘彩祭り’ 右:‘ロゼフローラカスケード’

祭り’は挿し木2年生苗でも大半が着らいし、着らい性がきわめて高いことが明らかになった。

以上のように、‘彩祭り’および‘雪祭り’は、‘ロ・カスケード’に比べて自然開花期が約1月早く早春咲き性で、樹姿が立性を示すなど、同品種にはない新規性を有しながら、‘ロ・カスケード’と同等の挿し木発根性や生育特性が確認されたことなどから、ともに鉢物用ツバキとして十分な適性を有するものと考えられた。なお、幼木の生育・開花特性について両品種に若干の差があり、‘彩祭り’は栄養生長が盛んで施設下における生育特性で優れたのに対し、‘雪祭り’は幼木で着らい性が高いことが明らかになった。

3) 適地および栽培上の留意点

全国的に適応すると考えられるが、現在のツバキの苗木の主要な産地は福岡県、埼玉県などである。庭木用としては、関東以西の利用が適していると考えられる。ピンク色の‘彩祭り’と白色の‘雪祭り’とを対にした生産出荷が可能と思われるが、‘彩祭り’は‘雪祭り’に比べて苗の初期生育は優れているものの、蕾の着生率が低い。両者のバランスをとる必要がある。挿し木発根性がそれほど高くないので育苗期間を長くする必要がある。全国的に適応すると考えられるが、現在のツバキの苗木の主要な産地は福岡県、埼玉県などである。庭木用としては、関東以西の利用が適していると考えられる。

4) 品種名の由来

両品種とも開花盛期が雛祭りのころで、一方は鮮やかなピンクの花を、もう一方は明るい白の花を咲かせることから、‘彩祭り’(Ayamatsuri)と‘雪祭り’(Yukimatsuri)と命名された。

9) 摘要

1) 立性で小輪多花性かつ早春咲き性をもつなどの鉢物・庭木用に適した新しいツバキ種間雑種の育成を目的として、*Theopsis* 節内種間交雑を行った。1990年、ローゼフローラ等野生種4種にシラハツバキ等3種を、562花交配した。

2) 種子親をローゼフローラ (*Camellia rosaeflora*)、花粉親をシラハツバキ (*C. fraterna*) とした121花の交配から、12粒を採種、播種後に得た6個体を1993年圃場に定植した。1998年に系統名‘1+2’、‘1+6’について安濃番号を付し、3ヶ年にわたり試作を行った結果、両系統とも実用品種として有望と判定され、2002年8月につ

ばき農林2号‘彩祭り’および同3号‘雪祭り’として命名登録された。

3) 両品種とも、立性で垂れ下り気味の淡緑色の葉を着生し、ツバキやサザンカとは異なった明るくやわらかな独特の樹姿である。

4) ‘彩祭り’は明るいピンク色 (JHS カラーチャート9504)、‘雪祭り’は明るい白色 (JHS カラーチャート2201) の花色で、両系統とも、花径3cm程度、花弁数5~6枚の極小輪の一重の花を、多数着生する。

5) 三重県における露地での自然開花期は、‘彩祭り’は2月上旬から4月中旬、‘雪祭り’は2月中旬から4月中旬と長い。冬季加温した施設下では、両品種とも12月上旬から1月上旬に開花が集中する。

6) 両品種とも挿し木繁殖が可能で、‘彩祭り’は挿し木3年生苗で、‘雪祭り’は挿し木2年生苗での着らいが見込まれる。

10) 引用文献

- Ackerman, W.L. 1971. Genetic and cytological studies with *Camellia* and related Genera. Technical Bulletin 1437. U.S. Depart. Agr. pp115.
- 張 宏達. 1981. 山茶属植物的系統研究. 中山大学学报 (自然科学). pp180.
- 萩屋 薫. 1990. 期待のミニツバキ. ガーデンライフ. 263, 15-38.
- 箱田直紀・足立尚義. 1985. ツバキ属の原種—西武舞鶴植物研究所で収集した種を中心として—. 西武舞鶴植物研究所報告, 1, 1-54.
- 関 天禄. 1999. 世界山茶属的研究. 雲南科技出版社. 昆明. pp352.
- Sealy, J.R. 1958. A reversion of genus *camellia*. Royal Horticultural Society, London. pp239.